

KOBUNSHA
BUNKO

豊田行二

長編インサイド・ノベル

政界献金部長





光文社文庫

長編インサイド・ノベル

政界献金部長

著者 豊田 行 二

1989年7月20日 初版1刷発行

発行者	大 坪 昌 夫
印刷	豊 国 印 刷
製本	光 洋 製 本

発行所 株式会社 光 文 社
〒112-11 東京都文京区音羽2-12-13
電話 東京 03(942)2241(代表)
振替 東京 6-115347

© Kōji Toyoda 1989
落丁本・乱丁本はお取替えいたします。
ISBN4-334-70971-0 Printed in Japan

光文社文庫

江苏工业学院图书馆

長編インサイドノベル

政界献金部長
「ニッポン献金部長」改題
藏書章

とよだ こうじ
豊田行二



光 文 社

目次

仮	の	姿	5
疑獄の教訓	33		
お金は木の葉	58		
政治献金の使われ方	83		
金権政治と献金	112		
天下りへの抵抗	136		
副会長就任	161		
裏の人から表の人へ	184		
実力者	207		
後継総理の選定	231		
権力の魔力	254		
男の花道	276		
解説 青木直也	301		

仮の姿

1

地下鉄千代田線の国会議事堂前駅のヒルトン・ホテル側の出口の階段を、かつぎ恰幅のいい老人がゆつくりと上がってきた。

白いものが交じっているが、頭髮は豊かだった。年齢はとつくに七十歳を超えているはずだが、見た感じは五、六歳若い。

長方形の顔に、どんな秘密もたちどころに見抜いてしまうような大きな目。どこか親しみが感じられる垂れ下がった太い眉。まゆ

鼻の下にたくわえた髭は白い。ひげ

地下鉄の出口から出てくると、男はまっすぐにヒルトン・ホテルに向かった。時刻は午前八時にまもなくならうとしていた。

五月の第二火曜日。

天気予報では、平年よりも五度近く暑い日になるということだった。

男は、ワイシャツにネクタイを締め、上下そろいの灰色の背広を着ていた。しかし、服装にはむとんちやくらしく、ネクタイは結び目が曲がっていた。

背広のポケットには無造作に重いものをつつ込む癖があるらしく、垂れさがり、型崩れがしている。ポケットの蓋は、片方がめくれあがり、片方は中へ入ったままだ。

靴は、ラッシュ・アワーの地下鉄でさんざん踏まれたらしく、汚れている。

男は、ヒルトン・ホテルの玄関に入ると、ロビーを横切って、エレベーター・ホールに歩いていった。上りのボタンを押して待つ。

やって来たエレベーターに乗り込むと、男は七階のボタンを押した。ほかに客はない。

七階でエレベーターを降りたとたん、男の前に目つきの鋭い男が仁王立ちになった。背広の襟に「SP」の赤いバッジがついている。VIPの身辺警護のボディガードだった。

「どちらへ？」

SPは、一流ホテルの客にしては不似合いな服装の老人を、無遠慮に眺めまわして尋ねた。

「七〇一号室」

老人は答えて歩きだそうとした。

SPはその進路を体でふさいだ。

「失礼ですが、あなたは？」

値踏みをするような目で、男の顔を上からのぞき込む。

「花山清五郎はなやまきよごろうです」

老人は、SPの無礼な質問にも顔色を変えることなく、名前を名のった。政財界にちよつとも関心のあるものなら、だれでも知っている名前だった。

「どちらの花山さんですか」

SPは肩書を聞いた。

「経営連の副会長兼事務総長の花山清五郎です」

老人は辛抱強く答える。

「しばらくここでお待ちください」

SPは、花山をエレベーター・ホールで待たせると、とっつきの七〇一号室のドアをノックした。

別のSPが顔を出した。そのSPに花山のことを取り次ぐ。

「お通ししてくれ」

張りのある声が部屋の中からSPにいった。

「どうぞ」

SPは、花山を手招きし、ドアを大きく開いた。

花山は、ふたりのSPに軽くうなずくと、七〇一号室に入った。

「朝早くからお呼び立てして申し訳ありません。火曜日は定例閣議の日でしてね。閣議の前に、ぜひとも花山さんにお目にかかって、ご相談しておきたいことがありましたので……」

部屋の中の応接セットの椅子から、大きな額に細い目の老人が立ち上がり、愛想のいい笑顔で花山に手を差し出して握手を求めた。

老人は鈴島^{すずしま}総理大臣だった。

総理は秘書官の木崎^{きざき}といっしょだった。

鈴島総理のへりくだった態度に、ふたりのSPは思わず顔を見合わせた。

総理大臣に面会する客は、きちんとした服装をし、緊張にいくぶん青ざめ、なんとなく落ち着かないもの、というのがSPの常識だった。

花山はその常識をぶちこわす面会客だった。

「官邸や私邸に来ていただくと目立つので、わざとホテルにしたのです」

鈴島総理は自分の向かい側の椅子を勧めた。

木崎秘書官がふたりのSPに席を外すように指示する。

ふたりのSPはうなずいて部屋を出ていった。

「ところで、ご足労をいただいたのはほかでもありません。閣僚のひとりの放言をめぐって野党側が態度を硬化させ、国会の運営がぎくしゃくしてきました。そこで、こちらとすれば、場合によっては国会の解散もありうるぞ、ということをおわせながら野党を牽制^{けんせい}したいので

す」

鈴島総理は、きちんと椅子に腰を下ろし、背筋を伸ばした。

「なるほど。しかし、解散風はいったん吹きだすと止められなくなり、うそから出たまことで一挙に解散へ突っ走ることもある。そのための準備をしろ、とこういうことですね」

花山は、椅子に浅く腰を下ろし、膝^{ひざ}を組んだ。

「さすがに花山さんだ。よくわかつている」

鈴島総理はおもねるように笑った。

「この道三十年ですからね、むだ飯は食っていませんよ」

「財界の政治献金部長とか、日本株式会社献金部長とか、ミスター政治献金とか、きみもマスコミにいろいろと言われてきたからねえ。しかし、党はきみに感謝しているよ。政界音痴の多い財界をとりまとめ、毎年多額の政治献金を行なってくれたきみのおかげで、今日のわが党の長期安定政権は実現したのだからね。その長期安定政権が今日の日本の繁栄をもたらしたのだから、きみは、わが党だけでなく、日本の恩人でもある」

鈴島は熱っぽく花山を持ち上げた。

花山は、苦笑しながら、総理の次のことばを待つ。

「解散をすれば、百五十億円は必要だ」

ひと呼吸おいて、鈴島総理は本題に入った。

「来年は参議院議員の改選の年ですよ。その選挙にも百億円は必要でしょう」

「そんなことは何年も前からわかっていることだよ」

鈴島はわざと不快そうな顔をした。

「来年、衆参同時選挙なら、百五十億円はなんとかいたしましょう。しかし、ことし解散して百五十億円というのは無理です。せいぜいかき集めて百億円。その場合は、来年の参院選にひねり出せる金額は百億円を大幅に割ることになりますよ」

花山は、鈴島総理の表情など意に介さず、齒に衣きぬを着せずにいう。

「解散で百五十億円はどうしても無理かね」

「貿易摩擦に円高、世界的な不況と、環境が悪すぎますよ。政府保守党はわれわれの苦しみをまるでわかってくれないじゃないか、何もしてくれないじゃないか、という不満の声は、財界内部でも高まっています。そこに、解散だ、百五十億出せ、といひましても……」

花山は首を振った。

鈴島は、額に皺しわを刻んで、しばらく目を閉じていた。

権力の頂点に立ちながら、自分の思うようにことが運ばないいらだちが、その表情ににじみ出ていた。

目を開いたとき、鈴島は穏やかな顔になっていた。

「わかった。解散をちらつかせるのはやめよう」

そういう。

「それでは」

花山は立ち上がった。

「花山君」

一礼してドアに向かう花山を鈴島が呼び止めた。

「は？」

花山は振り返る。

「きみは東大時代はマルクス学者の中内兵介先生なかうちへいすけに師事していたのだったね」

鈴島は口もとに微笑を浮かべていた。

「総理も、昭和二十二年四月の第二十三回総選挙で初当選をされたときは、革新の日本社衆党でしたね」

花山も笑顔でいう。

「あのころは、日本を再建するには社会主義でいくしかない、と思い込んでいたからねえ」

「ひよっとすると、総理とわたしは、日本の資本主義を倒すために手を結んで戦っていたかもしれないね」

「ばくも、今、それを考えていたところだよ」

鈴島総理はにやりとした。

ヒルトン・ホテルを出ると、花山は、タクシーを拾って、大手町の経営連に行くように命じた。

財界の団体には、経営連のほかに、日営連、日本商工業会議所、経営同友会の三団体がある。経営連は、財界四団体の中では、トップにランクされている。そして、経営連の会長は「財界総理」とも呼ばれている。

その経営連の副会長兼事務総長だから、花山は、その気になれば、黒塗りの乗用車を自由に乗りまわすこともできる。ほかの副会長がそうしているように、鎌倉かまくらの自宅に黒塗りの乗用車で朝晩送迎させることも可能である。

しかし、花山は、よほどのことがないと、黒塗りの乗用車は使わなかった。

鎌倉の自宅からの通勤は、もっぱら湘南電車しょうなんでんしゃである。

この日も、午前六時過ぎに家を出て、バスで鎌倉駅に向かい、国電と地下鉄を乗り継いで総理に会いに来たのだった。

むだを排す、というのが花山の生き方だった。

その花山が、むだの代表的なものといってもいい財界の政治献金を扱うようになって三十年以上になる。

保守党の政治家たちは、花山の平素の質素な暮らしぶりを知っているだけに、あまりむちゃくちな要求はしかねているところがある。

タクシーは、渋滞に巻き込まれて、遅々として進まなかった。

やはり地下鉄にするのだったな、と花山は後悔した。しかし、いまさらあせってみてもしかたがない。

花山は、あきらめて、リアシートに体を埋め、目を閉じた。

きみは、わが党だけでなく、日本の恩人だよ、といった鈴島総理のことだが、耳の奥によみがえった。

時の総理大臣に、日本の恩人とまでいわれて、花山は悪い気はしなかった。自分を抜きにしては、今日の日本はありえなかったのだと思うと、胸を張りたい気持ちになる。しかし、七十五歳の今日まで、花山は一度も表舞台に登場したことはない。「陰の人」に徹してきた。

経営連のほかの副会長たちは、いずれも、大企業の経営者か、経営者のOBである。それに対して、花山は経営連の事務局一筋に歩いてきた男だった。

昭和十七年に経営連の前身である重要産業協会の職員となって以来、戦後、経営連と看板を替えてからも、二十二年に総務部長、三十一年に事務局次長、三十五年に理事、と、縁の下で力持ちを務め、五十年に事務総長になった。

そして、五十一年には、長年の功を認められ、事務総長兼任の副会長のポストに就いた。

このときに花山は初めて、マスコミのまぶしいほどのスポットライトを浴びた。しかし、副会長といっても裏方の事務局の職員であることに変わりはない。

経営連の会長や副会長は名誉職である。したがって手当はつかない。花山も、副会長になったからといって、収入が急増したわけではない。従来どおり、花山の収入は職員として受け取る事務総長の給料だけだった。

マスコミは花山を「ミスター政治献金」と呼び、あたかも政治献金だけのために存在する人物のような書き方をする。だが、政治献金をとりまとめるのは花山の仕事の一部にすぎない。決して政治献金専門の職員ではない。

しかし、政治献金は花山抜きには考えられないことも事実だった。

はじめ、花山は、上からの指示によって、各企業を回って金を集め、それを言われる場所に運び、受け取りに現われた政界人に政治献金として渡していたにすぎない。

政治献金という金の性格上、各企業の利益代表の形で役員になっている人物が、集めたり、運んだりするのは好ましくなく、職員にその仕事を押しつけられたのだった。

しかも、大金を取り扱うのであるから、職員ならだれでもいいというわけにはいかなかった。職員の中から、大金を扱わせてもまちがいのない者、秘密に対して口が堅い者として、花山に白羽の矢が立てられたのである。

同じ仕事を続けていれば、スペシャリストになるのはあたりまえのことである。花山が政治

献金のスペシャリストになったのも当然のことである。

政治献金に関して花山が見たり聞いたりしたことは、大半が極秘にしなければならなかった。

そのために、花山は、メモ類は一切、残さなかった。何かあったときにメモは重要な証拠になる。必要なことがらはすべて脳細胞にたたき込んだ。

経営連ビルでは、会長室で稲田嘉弘いなだよしひろ会長が花山を待っていた。

「総理の話はなんだった？」

読みかけの新聞から顔を上げ、老眼鏡を外して尋ねる。花山は、稲田会長にだけは、鈴島総理に呼ばれていることを話しておいた。

花山はありのままを報告した。

「百五十億円とは鈴島総理も吹っかけてきたものだな。財界を打ち出の小槌こづちかなにかのように考えているのだからやりきれないよ」

稲田は眉間みけんに深く皺を刻んだ。

稲田嘉弘は第五代目の経営連の会長だった。五十五年^{ごごごご}に第五代会長に選ばれ、一期二年間の任期を務め、再選されたばかりだった。花山はこれまで四人の会長に仕えてきた。

稲田は、日本最大の製鉄会社の新光製鉄の会長を最後に、第一線を退いて取締役相談役になり、今は経営連会長として財界活動に専念している。温厚な人柄は財界のまとめ役にうってつ